

西要寺だより

第118号 令和7年3月8日



今号の「西要寺だより」では、お釈迦様がお説きになったお経の一つ、『仏説観無量寿経(ぶつせつ かんむりょうじゅきょう)』(略して『観経(かんぎょう)』)に登場する人物をご紹介します。

なぜ『観経』の話を取り上げるのかというと、今年の永代経法要(5月)と報恩講法要(10月)で、『観経』にまつわるお話をさせていただく予定だからです。

○主な登場人物の紹介

お釈迦様

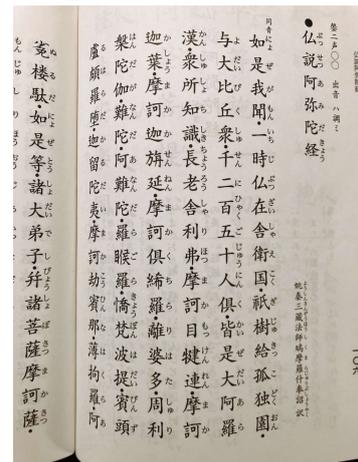
みなさん、一度は聞いたことがある超有名人、「お釈迦様」。古代インドの言語では「Buddha(ブツダ)」といい、敬意を込めて「釈尊」や「釈迦牟尼世尊(しゃかむにせそん)」とも呼ばれます。

漢文で書かれたお経のタイトルには『仏説○○経』といった形がよく見られますが、ここでいう「仏」とは「仏陀(ぶつだ)」のこと。仏・仏陀は「悟った者」「真理に目覚めた者」という意味を持ち、お釈迦様を指します。

たとえば、お経に「一時仏在○○」とあれば、「あるとき、お釈迦様が○○におられて…」という意味です。また、「仏告長老舍利弗」とあれば、「お釈迦様が長老・舍利弗(しゃりほつ:十大弟子の筆頭格)に仰せになった」ということを表します。今後、『仏説○○経』を読む際には、「仏=お釈迦様」と意識してみてください。

お釈迦様は、もともと古代インド(現在のネパールとの国境付近)の釈迦族の王子として生まれました。しかし、若き日より「生・老・病・死」の苦しみに悩み、深く思索を重ねます。そして、その苦しみを克服するため、名誉・地位・財産を捨て、国王の両親や妻子を残して出家しました。

6年間の厳しい修行の末、35歳で「生死(しょうじ)を超える道」を悟り、仏(成仏)となります。その後、80歳で入滅するまで、多くの人々に向けて「悟りの道(真理の法)」を説き続けました。つまり、仏陀=悟った者であるお釈迦様が説いた「仏となる教え」、これこそが「仏教」なのです。



ビンビサーラ（頻婆娑羅 びんばしゃら）

当時のインドにおける二大大国の一つ、マガダ国の国王。正妻イダイケとの間に跡継ぎがないことを案じた王は、ある時、占い師に相談しました。すると、山で修行する仙人が三年後に亡くなり、その後、王の御子として生まれてくると告げられます。王は家来に仙人のもとへ行かせましたが、仙人は「残りの三年を修行に捧げる」と宣言しました。しかし王は「三年も待てない」と考え、ついに家来に命じて仙人を殺害させます。



その後、念願の子が正妻イダイケの胎内に宿りました。しかし、今度は占い師から「その子は将来、王であるあなたを害する」と予言され、王は生まれるのを阻止しようと思いました。

そうした困難を乗り越えて生まれたのが、待望の男児・アジャセ（阿闍世）。生まれてしまえば王の息子、王太子として育てられました。そして最終的に、アジャセは――。彼の行く末は、今年の永代経や報恩講のご法座でお聞きいただけるかと思えます（ご講師さま次第ですが）。

史実として、マガダ国のビンビサーラ王はお釈迦様と親しく、仏教教団の支援者でもありました。初期仏教教団の発展に大きく貢献したとされています。

イダイケ（韋提希）

ビンビサーラ王の正妻。

『観経』では「韋提希（いだいけ）」と表記され、「正信偈」の「与韋提等獲三忍」にも登場する「韋提」です。



王との間に男児を授からず悩んでいた高貴な女性。占い師の言葉を信じ、その助言のままに仙人を見殺しにして子を身ごもりました。しかし、不吉な予言を受けた王は、生まれる前にわが子を亡き者にしようとしています。それでも彼女は懸命に守り通し、ついにアジャセ（阿闍世）を出産しました。

しかし、成長したアジャセはクーデターを起こし、父王だけでなく母である韋提希も殺そうとします。最終的に彼女は幽閉され、閉ざされた部屋の中で嘆き悲しみました。そして、お釈迦様に助けを求め、「お弟子をおつかわしてください」と願ったところ――なんと、お釈迦様ご本人が牢獄に現れたのです！すると韋提希は、お釈迦様に向かって嘆きながらも激しく訴えます。

「なぜ私は、あのような悪い子を産んでしまったのでしょうか？」

「あの子も悪いが、あなたの従兄弟であり弟子でもある者がアジャセをそそのかした！なぜ、そんな人間がああなたの親族なののでしょうか？」と――。

アジャセ（阿闍世）

マガダ国の王・ビンビサーラと正妻イダイケの間に生まれた王太子。

アジャセは、自身の出生の秘密を知らずに育ちました。しかしある時、お釈迦様の従兄弟であり弟子でもあるダイバダッタ（提婆達多）から、自分の前世が両親に殺された仙人であること、生まれるまで父王に命を狙われていたことを知らされ、激しく逆上します。

アジャセは家来に命じ、父王を幽閉し、飲食を断って餓死させようとしてしました。これは事実上、大国マガダでのクーデターでした。しかし、なかなか父が衰えないと報告を受け、母イダイケが密かに食事を与えていると知ると、今度は母までも殺そうとします。さすがに母殺しは大臣から強く諫められ、最終的にイダイケを幽閉するにとどめました。その後、さまざまな出来事を経て深く後悔し、懺悔して、お釈迦様に深く帰依したと伝えられています。

『仏説観無量寿経』は、このような状況の中で説かれた、お釈迦様（仏）の教えを中心とするお経です。

「さて、この経典は、私たちに何を伝えようとしているのでしょうか？」

そのおこころを素直にうかがうことこそ、仏法聴聞の要となります。

経典に書かれた古い言葉を、辞書的な意味で勝手に解釈するだけでは、仏法の大切な教えを誤って受け取ってしまいます。私たちがいただいている「お聖教（しょうぎょう）」とは、私たちに生きるべき道を示してくださる聖なる真実の法そのものです。その言葉は、難しく感じられるかもしれません。耳になじまないこともあるでしょう。

しかし、「今、ここに苦悩を抱えて生きる私」が、お釈迦様の真意を、宗祖・親鸞聖人の視座を通して、そのまま聞かせていただくこと——それこそが、何より大切な聞法の道なのです。

ぜひ、ご法座にお参りください。

「お経さまのおこころ」を、共に聞かせていただきましょう。



● 聴聞が一番の良薬

これは、以前、西要寺の総代さんが『本願寺新報』に投稿してくださった際の言葉です。当時は、新型コロナの流行により聞法の方が次々と無くなっていた中、久しぶりに集いの場に参加された際の率直なお気持ちだったようです。

お寺に通い慣れていないうちは、法話の意味がよく分からないと覚えることも覚えるでしょう。しかし、ここでの「良薬」は、すぐに効果が表れるものでは

なく、じわじわと効いてくる体質改善のサプリメントのようなものだと思って
いただくとよいでしょう。

聞き続けるうちに、ふと心に染みってくる瞬間があり、「阿弥陀さまってあり
がたいな」と感じられるようになる——それが、仏法とのご縁なのです。

◎西要寺行事予定◎

【定例法座】

3月22日（土）午後2時より

テーマ：御文章 ～無常のいのちを生きるということ～

講師：西要寺住職

場所：西要寺本堂

【定例法座】

4月22日（火）午後2時より

テーマ：お経さまのころ

講師：星野 親行師

（高槻・行信教校講師 豊中市 西法寺住職）

場所：西要寺本堂

ホームページ（saiyouji.com）



または さいようじ **西要寺** と検索ください。

浄土真宗本願寺派

さいようじ
西要寺

661-0024 尼崎市三反田町1-7-27

TEL 06-6429-8241